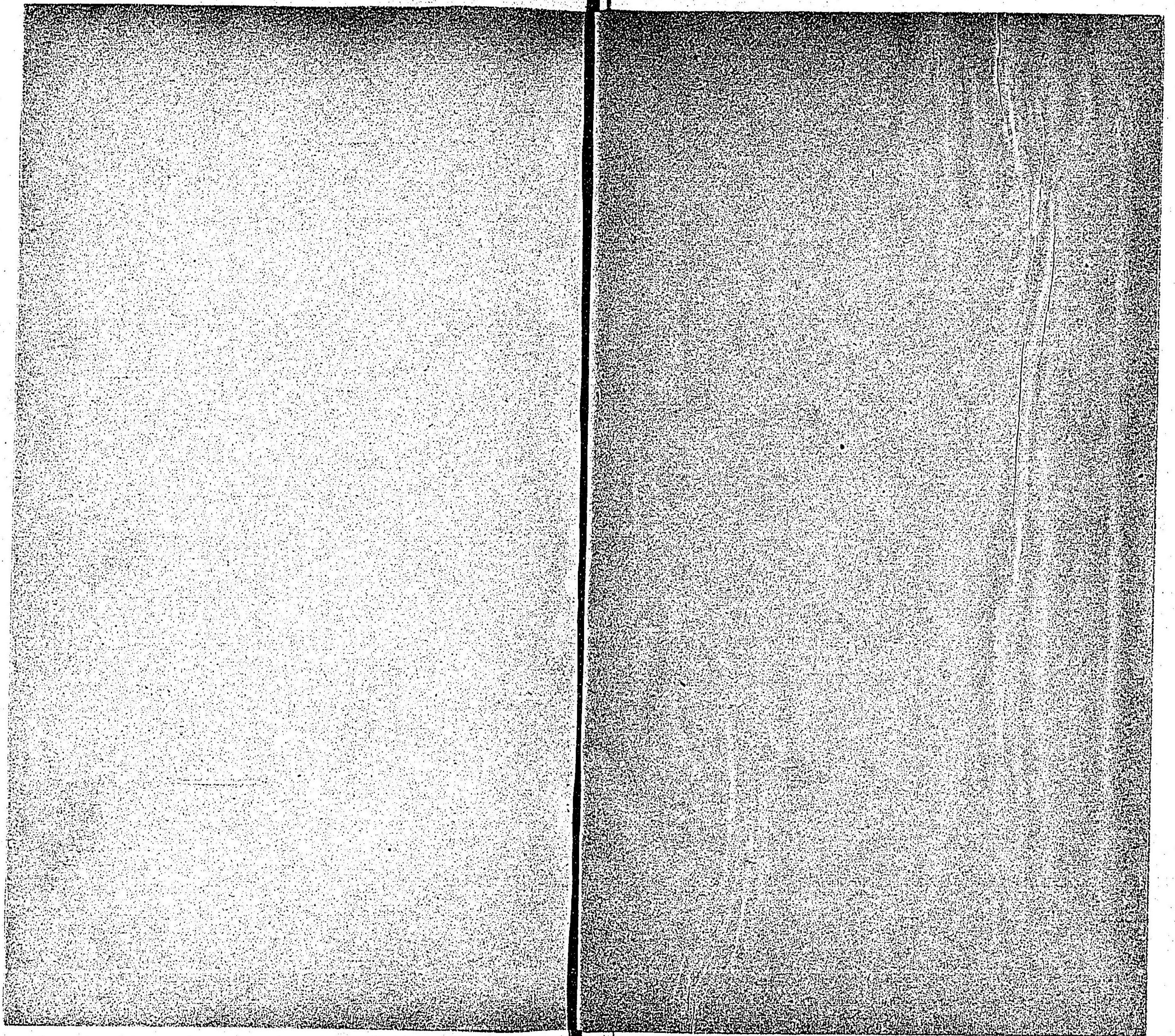


容 易

覺

千
里
眼







千鶴千船御人婦眼里千

● 目 次

物理學上推新不能に屬する千里眼	三
神 覺 と 千 里 眼	六
人類通有性たる心靈の發揮	一七
疑問に屬する心靈の發揮	二七
千鶴子とメトレル女の千里眼對照	三九
神通力夫眼通とは即ち心靈の發揮	四六
他動的心靈發揮と幽靈幻覺等の暗示	五三
覺醒状態と催眠状態の千里眼	六〇
幻覺を證明する岡崎の千里眼	六六

明治
43.11.4
内交

千里眼透覺術の修養……………(五)

参考の事實と研究材料

- 御船千鶴女の實驗……………(現在)
- メトレル女の事蹟……………(没)
- マーレー女の能力……………(没)
- スヴェーデンボルグ博士の奇言……………(没)
- 松浦菊子の試験……………(現存)
- 同 梅子の試験……………(現在)

其他數件

透覺 千里眼 容易

米國神學博士 ゼームス アリストン 閣
日本心理學會 高橋政之 著

一 物理學上推斷不能に屬する千里眼

千里眼なる三文字は、刻下の大問題として。理、哲、文、醫、あらゆる諸學科に於ける。碩學博識の諸博士の手に委せられ。研究中に屬しつつ、今猶明晰なる頭腦を以て。完全に其理を解決し能はざる。一種靈妙、幽玄の心的作用に於ける。或る程度に限られた一の透覺術にして、熊本縣の人。御船千鶴子女史に因て始めて公にせられた名稱であるかの如く誤認せる者あるも。古來我國は固より。東洋諸州歐米各國に於て十八世紀時代より行はれた不可解の心的作用にて千里眼なる透覺術の。術者千鶴子女史は郷里熊本にある時。或る動機から常人の成し能はざる透覺力を得て。屢々人

を驚かし神の如くに偉大の尊敬を拂はれ、學者の頭腦を痛ましつゝある誠に稀有の婦人には違ひないが、吾輩をして忌憚なく言はしめたなら、決して不思議でもなければ驚愕と尊敬をする程の價值はない。开は何人にも透覺術應用の資格ある者にして、練磨研究をすれば、容易に成し能ふからである。斯く公言はするもの、決して千鶴子女史を、輕侮するの意志は微塵も著者は持つて居らぬのみか、能く今日の程度まで、練磨研究したかを賞讃するに吝ならざる一人である。今日まで實驗した千鶴子女史の心的作用が完全に成功したとは認識はしない。女史にして今日の意志を繼續し、堅忍練磨をなさば、一世を驚倒せしむる底の技術を獲得するであらふ事は信じて疑はない。福來今村兩博士の紹介と斡旋に基き、御船千鶴子女史東上し。其第一回の試験を大橋邸に行ふに當り、兩博士より各學科の諸博士に臨場實驗を求められた際、一人に山川理學博士は下の如き意見を吐れた。

我友福來君の紹介する御船千鶴子が實行すると云ふ、透覺力が自ら聲明する如く

紹介者の證言する如く、果して正確に的中するとせば、世界の科學界の新記録にして、透覺にも非ず心理感應にもあらず、千鶴子婦人獨特のものにて、何等の名稱をも付し難き一大事實となる可きを以て、世界の心理學界に進んで發表すべきなれど、我國學者は、假りに實驗上疑ふ可き餘地なしとするも、歐米の學者は俄に贊同するであらふが、懸念するのは現に斯云ふ事がある、伊太利のトンノ大學員外教授で、犯罪心理學の大家、故ロンブロー博士すら、ユーサー・チャン・バラチノー嬢に散々に愚弄せられ、人は死すとも靈魂は死せずと誤られ、博士は彼嬢の種々なる、死靈活動の實驗を目撃し、一世の碩學も、之を妄信して終に逝しが、博士逝去して時を経ざる本年の春、手品師のバラチノーなる者、又々大學者連中を欺いた、其バラチノーの方法は、暗夜薄闇き一室の机に對し、傍に兩手兩足を摩しつゝある監視人を置きしに、彼は身動きもせざるに眼前の机上下左右に動搖し始め、机の舞を演せしが、此際背後に一寫真師がマグネシウムを點火

して寫眞を取りしが、驚くべし此寫眞には、彼女が二本の手足を以て自由自在に機械を操縦せるを明瞭に映寫せしを以て、遂に彼の手品は發覺し、碩學ロンフロー博士を欺きし學界の新事實存する際なれば、歐米の學者は容易に信用せざるのみならず、輕々に發表して失敗を招きては、我學界の威信にも關する重大事件なれば、余は千鶴子を疑はずとしても、最も完全なる手段器具にて透覺す可き確證を得たので、若し之を得たときは、我學界の誇として世界に發表するも、秋毫の躊躇を要せず、故に充分なる實驗を行ふ精神である。

如上は山川博士が、人に公言した處で、女史の千里眼を疑ふて居られたは明白に判ると共に、女史をしてバラチノ一輩に擬して居るのでない事も亦た判つて居る。要するに、博士の碩學博識を以てするも、到底物理學上の推斷は不可能である事が、證されて餘りある、然り物理學、醫學上、今日の程度に於ては、其蘊奥を究めると雖、恐らく其理を究め難きは千里眼である。

二 禪學と千里眼

凡そ此世の中に於ける總ての事物は、深く其理を探ぐり究めて、明白ならざる道理はない筈、否斷して筈處ではない、絶對的にないのだ。然るに一婦人千鶴子女史の、透覺力即ち千里眼のみ、推斷不可能たる可き理由あらんや。吾輩をして言はしめば不可能ではない、推理研究の未たなのである、試みに思へ、獨り千里眼のみ殊更ら仰々しく不可思議なるこそ、不可思議なり。彼の禪學の蘊蓄者に就て查なば、隨分千里眼透覺術以上常人をして驚倒せしむる事を敢て行ふて居るではないか。

精神修養に最も完全の偉功を奏するは、禪の悟道を究むるにありとは、何人と雖恐らく異存のない處なる可きも、其精神修養全く成り、禪の奥に入りたる人は、日本廣しといへども幾人がある、實に指を屈して算する程の少數たるや論を俟さるべく、其少數の偉人が行ふ事實に對しては、俄に今日の科學的に當てはめ推斷を下さば、是れ又

不可能に屬すれど、近時禪學より出たる事物に對しては、稍具體的科學上の説明をする人もあるやうだが多くは單に心的作用の名稱を下すに止まるのである。然らば千鶴子の透覺力千里眼も、亦た當分の間は心的作用の名稱を付し置より他はあるまいが、近き將來には必ず具體的科學の説明を公にする事が出来る事を公言して憚らない。

三 人類通有性たる心靈の發揮

千里眼透覺は、所謂心的作用であれば、凡そ心靈の存在する動物であれば、必ず出来るのである、修養練磨せば無論容易の業に屬するも、何人と雖如何せば自己の心靈をして、五官以外斯る働きに耐へしむるのであるか、何を以てか練磨の目標とすべきか不明であるが故に、修養練磨が出来ないのである。心靈の修養練磨は、言ふまでもなく一朝一夕に成功するものでない、又人に依りては絶對的不成功に終る者もあるが、十に對する六までは必ず成功すると斷言して憚らざる

るは、人類の通有性にして、從來の實驗に照して明かであるからだ。其人類通有性たる、心靈作用の發揮を遺憾なからしめんには、如何せば可なるや、まづ其修養練磨の法を、徐々に説くに先だち、譬へ如何ほど修養練磨の功を積みたる人と雖

- 心靈の發揮を強ゆる時
- 恐怖心に襲はれたる時
- 利慾の念に充々たる時
- 他思他考の觀想浮む時

如上の四ヶ條の一たりとも、心靈作用の發揮せんとする際抵觸する場合は、斷じて失敗に終る可きは明らなる事實にして、現に千鶴子女史が、明治四十三年九月十四日、麴町中六番町なる大橋新太郎氏の邸にて、諸博士列席環視の前に實驗をなして、失敗

に終つたは、寧ろ當然なる事にて、女史の心靈作用練磨が不完全不熟練ばかりでは決して無いのである、其不成功たりし原因は

一、自己をして常人と超越したるを一般に公認せしめんとする念慮満々。
二、萬一失敗せば、自己の不名譽、又紹介者に對する不面目を恐るゝ念慮心頭を去らす。

三、如上の理由の爲め、無我の境に入る事能はざるにも拘はらず、心靈發揮を強ひたるため。

此三理由ありし決果として、靈妙なる女史の心靈作用を、公示する事が能はざりしは遺憾であつた。實は此實驗に因り、列席博士の中には窃かに女史を疑ふ者もあつた。乍去、其第二回の試験を自己の寓居たる旅館の一室に行つて、前回の不名譽失敗の、耻辱を雪いだは、心象學界の爲めに洵に喜ぶ可きも、未だ該試験が完全無缺に人類通有性たる、心靈の發揮を遺憾なからしめたとは決して認むる事能はざるので、今其當時の實驗の模様を鈔録し併て著者の意見を述べん。

時に明治四十三年九月十五日神田區淡路町二丁目一番地旅館關根屋の一室に於て千鶴子女史の靈能不可思議なる、心理作用は行はれた、在京各社の新聞記者も來館した。

術者御船千鶴子は、同館三階の北隅十疊の廣間の西側窓側に南向ひに唐机に對し障子を密閉し、靜かに端座し、室内は床の間に一軸と欄間に額を掛けたるのみ、其他何物をも止めず、入口及び左手の襖を固く鎖閉し、何人とも言語を交へず、實驗物の來るのを今や遲しと待ち居たるが、聽て二間離れたる控室にては、各自思ひ／＼に、飛雲殿、野拾穗、青山水、心神通の三文字を名刺形の厚紙に、各句都合四枚認め何人にも目睹せしめず、文字面を伏せ、何等交渉なき、記者の手にて都合四枚の内何れかを選び、之を福來博士所持の鉛の高さ四寸、周囲六七寸、厚さ六分位の瓶中に藏め其上を亦た鉛の六分位の厚さを有する蓋を施し其外面には、櫻板を以て製作せる厚さ四分餘の箱の内部に天鷲絨を張れる七寸位の角形器

物を以て蔽ひ、外部より鍵にて閉塞し、尙箱の筋目には一面に嚴重なる厚紙を貼
り、開閉全く不能となさしむる爲め封印を行ひ、一人の立會人は、聲音靜かに此
箱を持ち千鶴子に手渡したり。時に午前九時三十五分。

千鶴子は靜かに微笑みつゝ之を受取り靜かに前記机の上に置き、靜肅なる態度と
なり、禪の所謂心を丹田に下すと稱する姿勢を取り、両手を該箱の上部に當て、
目を閉ぢ沈思黙考すること、九分五十三秒〇四にて、透覺したるものと見え、徐
ろに筆を走らして、心神通と書しぬ。

室内には何人をも入れず、密閉せる襖一重の外に監視人を置きたるのみなれば、
果して的中せしや否やと疑ひを懐く中に、該箱を控室に持ち來りて、外圍の狀態
を檢するに、封印目張紙等、些の異狀なく以前の儘なりき。而して心神通の三字
を書したる記者あれど、該文字が果して箱中に在るや否やと、直に二重になれる
蓋を除けば、驚く可し、疑念を懐く餘地もなく確かに

心神通

の三字現れしかば、福來、今村兩博士始め並び居る記者は顔見合せて、此不可思
議なる心理作用に驚愕せり。

千鶴子は前日の失敗もあれば、今日こそはと思ひしと見え、的中せしや否やと、
甚だ不安の顔色にて、靜かに歩み來りしが、福來博士が少しく龜せる千鶴子の耳
に口寄せ

「能く的りました」

と聲高に報告した、彼女はさも愉快の面持にて、列席諸氏に默禮し座に返りぬ。
如斯にして第二次の透覺試験は成功した。

此事實は、都下の各新聞紙上に争ふて掲載したのであるから、何人と雖女史の靈能に
愕くと同時、多少の疑念を挾し挿んだ者も、絶對に無いとは言へぬ、併し決して女史
や博士記者等が徒らに奇を衒ふが爲め社會を欺く可き道理の無い事は、誰人とても

認めて居る、然らば歸する處千鶴子女史の透覺力即ち心的作用は、常人に超越する
と公認されて來るであらう。

女史が心靈の發揮に因りて如何にして透覺したるや、是を知らんと欲するは、萬人恐
らく同一の感ならんが、元より心靈の作用の事であるから、言ふまでもなく、千鶴子
の心靈が恚うの斯ふのと、他人の口や筆の先で言はれるものではない、自己が行ふて
見るより外當時の千鶴子に於ける心靈作用の如何を察知する事は到底不可能である。

四 疑問に屬する心靈發揮

第一次の大橋邸に於ける、透覺試験に失敗して、第二次の關根屋旅館の試験に成功
したる千鶴子の透覺力に、著者は一の疑念を生じたるなり、然れども其透覺が不正行
爲であるの、又は奸譎なる手段でありしや等の淺薄なる疑念は毛頭もない、正しく心
神通の三文字を透覺せし事は秋毫も怪しまないのなならず、實は畏敬して居る、乍去

疑問は疑問である、之を公言し汎く研究するに憚らざると信じ、著者の意見を述ぶる
に先だち、元良博士の意見を左に鈔録して研究の一材に供さん。

元良文學博士の談

千里眼婦人、御船千鶴子の透覺に就ては、十七日關根屋に於て、斯く迄嚴重にし
て、而かも正確に的中せしが故に、此實驗は毫も疑團を挿む餘地なしと信ず、
併し乍ら、關根屋に於ける實驗は、福來君所持の器物實驗及び三文字記入等に制
限を設けて、透覺可能性を認めしものなり。

千里眼は、本來意識の活動ある者の行ひなるを以て、無暗に強制し得ざるは勿論
なれど、此實驗が常に被實驗者の要求に支配せらるゝは、透覺の實驗が或程度ま
で不完全と言ふより外なし、現に關根屋の實驗が、已むを得ずとは言ひながら、
山川博士の製作物は、不慣なりとの理由の下に斥け、又事實病氣なりしなれど、

猶一回と實驗を要求せられしを中止したるが如きは、余等の立場として、多少遺憾とする所なり。

斯くの如き透覺が、從來他に在りしやと言ふに、此嚴重なる方法と、正確なる結果とは、未だ他に少なく、未聞の事實とは唱へ難しと雖、珍らしき事には相違なし、併し彼の

「甘い物には、蟻が集る」

と言ふ事ありて、蟻は人類の企及し得ざる、一種鋭敏なる嗅覺を有し、遠距離にありて臭を嗅ぎ付け、集合し來るは蟻の通有性なりと、一口に言つてのければ夫までだが、多少の参考となる可く、又盲者が事物を知るに當り、眼が視えざる故に、額に一種言ふべからざる鋭敏の感覺ありて事物を識別し、若し額を蔽へば、識別し得ずと言ふ一事實亦好個の研究資料となる可く、併しながら千鶴子の透覺可能性は、普通人類の有する機能が特に鋭敏になりて、透覺し得るものなりや、

或ひは從來科學者が未だ認知せざる獨特のものなりや、即ち理外の理なりやは此一回の實驗によりて、真に其何れかに斷定するは不可能なる事勿論なりと雖、余の思想の傾向は寧ろ人類の通有性に外ならずと信す。

殊に我國のみならず、外國に於ても之れに類似するもの數多ありて、現に我邦心象學會員中には、顔に品物を載せ眼を閉して、其何物なるやと形を知り判別する人有る事は、余も目撃せり、又外國に於て、千鶴子の透覺に最も近きは、彼のクリスタル。ゲーザーと稱するものにして、硝子、水等の如き光りたる物を注視すると、事物が之に映寫すと唱ふる者にして、其實例として記憶せるは、嘗て印度に在りし英國の一士官が、觀兵式に列する際、前日練兵場にて其練習をなし、或家に歸宿し、翌朝其式に列せんとする折、佩劍見付らず、殆ど途方に暮れつゝありしが、其家の下女が例のクリスタル。ゲーザーを行ふとの故を以て、早速盥に水を注ぎて、觀せしめたるに、其女中は暫く水面を凝視したる後、其佩劍は練

兵場の休憩室の壁に懸けあり、と言ふにより直に人を其休憩室に走らせたるに、果せる哉、壁に懸りありたりとて、持ち歸りしより、並み居る一同驚愕したりとの事なり、其他之に類似の透覺數ふるに違あらず云々。

博士の意も亦た女史以外の人類間に、現在の科學上不可解に屬する一種靈妙の心的作用ある事を確に認めつゝあるも、女史の關根屋に於ける實驗には、多少の疑問を抱けるや明けく、併しながら博士の疑問と著者の疑問は、或は同じからざるを信するなり著者の抱ける疑問を、露骨に言はしめば、心靈の作用は不定時の或場合自然に發揮す可きも、一定の時と場所を選び、五官の機能の如く、自由自在に、靈作用の活動を、觀覽物的に、公示せしむるは、不可能たる可く論斷を下した一人であつた。

然り而して、千鶴子女史の、靈妙の心的作用あるは信じて疑はざりしも、公衆の面前に實驗するを聞き、心竊かに其成功を疑ひしに、第一次の失敗を聞くに及びて最も然りと化した、去りながら、第二次實驗の成績を知るに及んで

一、心靈作用を、時として強ゆる事が能ふ可きか。

二、女史の實驗に對する觀念が、第一次の試驗失敗を念頭より悉く去しめしか。

三、實驗の成不成は毫も念頭に置かざりしか。

此三新理由生せし爲めに、成功したるとは解釋するより外ないのである。

五 千鶴子とメトレル女の千里眼對照

千里眼なる不可解の靈作用は、千鶴子女史獨特でない事は言ふまでもないが、現に斯ふ云ふ事實がある。

米國にて有名なる醫學界の泰斗、ドクトルブリットン氏の著書に曰く

一千八百五十五年の秋、米國ミチガン州の人にて、其名チャーレス・ペーカーなる者其友人と共に銃獵に出で、其同行者の爲めに過まつて射撃せられたり。其銃丸は洋袴の隠口を貫き、太腿部に入り爲めに隠袋内に藏めたる種々の物は碎けて其碎片深く肉

中に打込まれき。

直に手當をなし肉の中に入りし物は、悉く之を取去れり、然るに其傷は深くして、非常なる疼痛を起し、甚しき衰弱を來して、數ヶ月を経るも、其衰弱は未だ回復せざるのみならず、却て日に益々悪くなれり。

爰に於てドクトル、ブリツタンの診療を受くる事にはなつた。

ブリツタンは一應之を診察したる後、東部地方へ歸つたが、不圖心的作用に係る試験を行ふ可き機會に遭遇したりき。

當時、ハルトフォードと言へる處に千里眼を以て有名なるメトレルと呼ぶ婦人があつた、ブリツタンは試みに此婦人をして鑑定せしめんと考へ、直ちに之を喚び寄せたるも、固より患者の住所、身分、又た如何にして傷を得たか等は一切語らず、單に

ブリツタン曰く「嘗て余が診療を受けた一人の患者不思議の病症である、乞ふ嬢が通力試に之を鑑せよ」メトレル嬢は、沈黙考暫時にして曰く

妾は其患者の何者たるを知れり、并はミチガン州の人、チャーレス、ペーカー君ならん、患部は數ヶ月前の銃創ならん、而して其傷口より深く入込んだ何人も恐らく知る事を得ざる一個の銅片が残留してある、苦惱の總ては夫より來るが爲めに、其銅片を除去するにあらずんば癒へざるなり。

此メトレルの暗示に於ける事實を確む可くブリツタンは、患者ペーカーに之を糺し查べた、然るはペーカー夫れ自身は、負傷の當時隱囊内には銅片若くは銅にて造りたる物は、一として所持せざりし事の確信を答へ、如、旂、當初よりペーカーに診療を施したる醫者も、亦た其傷に銅片の入りて残留するが如き徴候は決して之を認めぬ事を斷言した、ブリツタンも亦た銅片残留より來る苦惱であるとは、醫學上の觀察では信じ得られざりき。

是を以てメトレル女の千里眼は全く誤れり、信するに足すと斷定されたのであつた。然るに其後に至つて、其傷口より何か異様なる一物少しく現れたり。

ペーカ一の母親は、剪刀を以て之を引出したるに、其出で來れる物は圓らざりき一個の銅貨なりき。

之れを除去したる後は苦惱も軽く、漸次に傷は平癒し患者は健康體に復する事を得た如何にして傷口より銅貨が出でしやと言へば、此銅貨は負傷の際、隱袋の中に在りて他の物品と共に肉中に打込まれたる物なれど、ペーカ一自身は銅貨ありし事を知らず、又醫士等も斯る物が猶肉内に残りあらんとは毫も思はざりし爲めメトレルの靈妙なる心的作用を一文の價值なく、空しく葬り去つたのであるが、爰に及んで之に關係した人々は畏敬賞讃、謝するに辭がなかつた。

幾百哩の遠隔の地にありて未聞未見の人の氏名を知り、患部症狀を悟り、接見してより、不明の肉體中の或物體を透覺したメトレル女の其神技、千鶴子女史に超越する幾層倍であるが、例り能はぬ。

併しメトレル女は、過去の人物、過去の神技、女史の如きは現在の人、現在に行ひつゝある一點の疑念を挿む餘地のない神技、所謂心的作用を得るに至つた動機を語るも、決して徒爾の業ではあるまい。

千鶴子女史の千里眼に於ける要點は、雜誌「婦人世界」五卷第七號にあり、爰に抜録すれば左の如くである。

御船千鶴子は、九州熊本の近傍、松合村の人にして本年(明治四)二十五年なり、此婦人が始めて千里眼を現はしたる事に就て、博士福來君の報告要領は婦人世界に記して遺憾なし曰く

千鶴子といふ婦人は別に他の婦人と變つた處はありません。

容貌は、まづ美なる方です。

感情は他人より脆いそうである。

千鶴子さんは、如何にして千里眼の心的作用を持つやうになつたかと申すのは、

兄さんの清原猛雄といへる人、明治三十六年頃より催眠術を稽古して居られたそう
 であります。が阿兄猛雄さんが、熊本の市に住んで、妹の千鶴子さんは市外松合村と
 言へる處に両親と同棲せられて居たです。一日妹の許へ來れた際、妹の家の女中に
 催眠術をかけて見られると、不思議に好果くかゝりました。开處で妹の千鶴子さん
 にもかけて見られると、是も巧くかゝつたそうでありました。

夫れから千鶴子さんは、屢兄さんに催眠術をかけて貰はれたそう、毎回能くかゝ
 つたそうであります。而して此催眠が絶頂になつて、遂に此千里眼に成つたのであ
 る。(四四、四五頁参照)

明治四十一年の七月頃、猛雄さんは千鶴子さんに對はれ「催眠術に罹らなくとも深
 呼吸をして無我の境に入れば、世の中は物は何でも見える」と言はれたそうです。
 千鶴子さんは阿兄の言葉信じて、毎日毎日深呼吸の練習を致されました。殆ど如
 斯十日間ばかり連続練習して見ると、何ともいはれぬ一種不思議な感覺を持つやう

に成つたと言ふ事です。

夫から一日千鶴子さんは、庭の縁側に立つて何心なく、梅の立木を眺めて居ると其
 梅の木に二分位の虫が見えたので「ア、虫が梅の木に居ます」と申されましたが、
 傍らに居た人が「爾那物體は居ない」と言ひましたのは、他の人の視力には映らぬ
 からで、併し千鶴子さんは「確かに居ます」と断言するので、傍らの人は、梅の木
 の皮を剥いて見ますと樹皮の下に、二分位の虫が果して居たさうです。

又一日、海岸へ遊びに行つて金の指環を海の中へ落しました、其時も自ら千里眼の
 力を試さうと思つて、石に腰掛けて、無我の境に入つて海を見つめて居ると、眼の
 前にあり〜と指環が見えました、其場所を探させて見ると、果して砂と貝との下
 に隠れて金の指環が、チャンとあつたさうです。

そこで兄さんが、これは不思議な事だ、雖に研究する價值があるといつて、熊本市
 の自宅へ千鶴子さんを呼寄せ試験をなさいました、其試験は

一「精神一到何事カナラザラム」

二「新式療法完成セバ天下萬民ノ幸福也」

三「.....」

如上の文字を三枚の各白紙に認め、夫を状袋に容れ、千鶴子さんに對つて、此中の紙には何と書いてあるかと訊ねられると、千鶴子さんは深呼吸をして沈思黙考の後、第一の方も、第二方も間違なく其文字を言ひ當てました、第三の方だけは意味は當つたけれども、文字通りには當らなかつたさうです(四六—四七頁参照)

一日の試験に「余田司馬人」といふ名刺を、状袋に入れて千鶴子さんの前に置く一字の違はあつたが當てた、又「恭賀新年 坂田敬三」と認めたのを試験した、是は一字の違ひなく當りましたさうです。

私(福來博士)は井芹熊本濟々賢長から紹介を得て、是は實に不思議なこと、學術上の一大問題である、確かに研究する價值があると思ひまして、今年の二月十六日、

通信で實驗して見た

其實験の方法は、十九枚の名刺を、不透明な紙に挟んだのや、錫の紙を貼りつけたのや、都合十九枚、嚴重に封印して、千鶴子さんの許に送りしました。

暫くすると、其答を送つてまいりました、尤も私の送つたのは、余り多數なため其中で四番から十番まで、合計七枚の答を送り越されたのでした、

其答曰く

四番は、文字見エズ、白紙一枚、別ノ一枚ニハ、長サ一寸ノ黒紙ハリアルヲ見ル是は名刺の上に、錫の紙を貼つて置たのです、次は、

「酒井忠道」

と確かに、的中しました、次に

「深井虎藏」

東京市小石川區小日向若衝谷町五十二番地

と答へ、井ト虎ノ上に、黒き紙ありと、答へて來ました、實際の私の認めたは。

「深水虎藏」

東京市小石川區小日向若荷谷町五十二番地

といふので、水を井と間違へたゞけて、細々しい、住所書は、一字も違はず、明瞭に的中しました。

其他十番まで、少々の間違ひがあつた、ばかりで、立派に答へてまゐりました。

斯云譯でしたから、是は面白いと思つて、私は(福来)博士(福来)四月上旬、京都大學の今村博士と同道で、熊本までまゐりました、而して、猛雄氏並びに、千鶴子さんに、お眼にかゝり四月十日、實驗にとりかゝりました、第一の實驗は

斯云形の、錫の箔の片を、状態に入れて、千鶴子さんに見せますと。



といふ形の紙ですとの答で、これは全然失敗しました、尤もこれは私共が遙々出張したゞめ、當地新聞などで、盛に書き立てたものですから、多分氣おくれがした

めでせうと思ひます

次の實驗は

茶壺の中へ、三十枚の名刺の中から、一枚ぬきとつて、入れて、見せますと、五分の後

「大嶋忠九郎」

と答へがありました、之れは少の、間違ひもありませんでした、次に

今村博士が、京都から持て行かれた、二重の箱で試験されましたが、是は失敗でした何故かといふに、其箱に何か、仕掛でもあるかと、思つて千鶴子さんに、不安の念を興へたからでせう。

翌十一日に再た、實驗にとりかゝりました、此日は熊本で購た、錫の饅の中へ、名刺を入れて、試験しましたが、之は的中した、次に今村博士か、猶且、熊本で買った、鐵瓶の中へ、名刺を入れて、試験されると

「串山寛次」

と七分二十秒の後、立派に答への中した。翌十二日は、試験場を變へて、見るのもよからうと思ひ、或る人の別荘を借りて、开處で試験しました。

今村博士は、最初の日に用ひられた、二重箱で、試験しようと思つて、番頭の名刺を紙に包み、それを、ハンカチーフで捲いて、其二重箱に入れました、それから其箱をビスケットの籠の中に入れて、千鶴子さんの前へ置くと、十三分四十二秒の後「貴君方は、私をおだましましたね、此中には、一昨日の箱が入れてあります」

と答へられた時は、皆顔を見合せて愕きました。

私(福来)は名刺以外のもので、試験しようと思つて、番頭に頼んで、錢入れに勝手に錢を入れて貰ひ、千鶴子さんに見せまします。

十錢が三個、二錢が一個、一錢一個。

と答へました

私は錢入れの中を調べて、見ますと、果して、其通り入つてゐました。(四七、

五〇頁参照)

以上の事實に對して、千鶴子の心靈が、非凡である事は、何人も拒む者はあるまい、又福来今村兩博士が、遙々、千鶴子を東上せしめ、諸博士紹介の勞を熱心にとりしも當然である、併し斯る非凡の心靈を、持ちながら、時に失敗するのは、何に因れるかの、疑問を研究したく、何人も欲する處であらう、然り而して、其失敗の原因が正確に、判然すれば、即ち自ら、透覺の眞理も了解するに至るのである。

六、神通力天眼通は即ち心靈の發揮

神通力とか、天眼通とか言へば何となく、少年お伽噺の書中に、用ゆべき文字の如く感ぜられ淺學輕識の措大が一笑に付し去るの、名稱である、乍去、名稱と文字が其技

に該當して居るや、否やは、別問題として、古來、我國は固より、支那印度、歐米各國に於て、頗る不可思議なる殆ど人類以外の、靈妙なる意識行動を、現實に公示したる者、枚擧に遑あらず、弘法大師の眞言密教中の、不思議の事實を始め、日蓮の如き一種不可解の事蹟を現はして、人を歸伏せしめた、イエズクリストの如き最も然り、凡人は皆な以て其理の不可解のため、神の技と信じ爾か名稱を下すに至つたのも、強ち笑ふにも當らぬのである、併し其實今日の千里眼の如く、卓絶したる著しき心靈の發揮に外ならないのである。

其例證として、一二を擧げんかな、弘法日蓮キリストの如きは、概ね人の知る處であるから、省畧して瑞西國にて十八世紀時代、活神として、偉大の尊敬を、國王及び國民全体より受けた、スヴェーデンボルヒと呼ぶ神秘哲學者の、奇蹟を参考に供する事にしやう、ボルヒは西曆一千六百八十八年、瑞西國に生れ、一千七百七十二年に八十四歳の高齡を以て此世を逝いた異人である。

此異人に就ては、種々の不思議なる、傳説あるが、最も確實と認む可き、奇談を、左に抄録せん。

一千七百五十六年九月、スヴェーデン、ボルヒは、英國よりコツテンブルヒに、到着せりスヴェーデンボルヒの、住家はストックホルムに在るので、即ちコツテンブルヒとは殆ど三百哩余、離れて居る。

スヴェーデンボルヒが、コツテンブルヒに、到着したるは、土曜日の午後なりき、其夕刻土地の名家カステル家より、招待を受けた、此時、スヴェーデンボルヒと會食する爲めに、カステル家に、招待されたもの十五人あつた。

スヴェーデンボルヒは、一世を驚倒せしむる、神學者としても、又哲學者としても、當代の大家であるを以て無論招待されて、其席に列せる十五人の客も、亦各々、相當の地位勢力、學識完備の、人々たりしは、疑ひなき所である。

夕刻の六時頃なりき、スヴェーデンボルヒは突然奇異なる容子をなして、何事か不安

に、堪えざる有様にて、街道へ出で行き、復た間もなく、歸り來りしが、列席の人々、之を見て甚だ不審に、思ひつゝ、其故を尋ねた。

スヴェーデンボルヒは、突然言へり。

「今、ストックホルムに大火あり」

と詳細に自己が、現に目撃せるが如くに、其状況を述べた。

「余が友人の家も既に一軒焼失せり、而して今や余が家も亦た、危険なるに至れり」と語り終つて、其色甚だ穩かならずである、列席の人々は、甚だ不思議に思つたよりは、寧ろ一笑に付し去つて、意に止めぬ人が、多數であつた。

然るに其夜八時頃に至り、スヴェーデンボルヒは、ストックホルム出火に就て、再び言をなして曰く。

「只今漸く鎮火をした、予が家より、僅かに三軒目の所まで焼け込み、其處に消し止めた」

スヴェーデンボルヒの言々、殆ど現場に目睹する如く、余りに眞面目である爲め此夜カステル家に集りし人の中には、少なからず奇異の觀念を懷いた者もあつた、故に、其人々の散すると共に、此不思議の言は、忽ちゴッテンブルヒ全市の、注意を惹くに至つた。

當時交通機關の、不完備なる、十八世紀時代ゴッテンブルヒは、三百哩の遠隔地たるストックホルムの出來事を知るには、迅くとも、二日余を経過せざれば、知る事を得ないのである。

其翌朝に至つて、ゴッテンブルヒ市の、知事は前夜カステル家にありし、スヴェーデンボルヒの奇異なる物語を、傳聞して、直に、特使を、同人方へ遣はして具さに、其事を問はしむ、スヴェーデンボルヒは、知事の質問に對ふるに、火災の状況一々精密に、報告をしたり。

月曜日、即ち三日目の朝に至つて、ストックホルムより、始めて飛脚到着した。

然るに不思議なる哉、スヴェーデンボルヒの語りたるに、寸毫も違はず、果して、土曜日の夕刻ストックホルムに、火災生りたる旨を、具さに此飛脚は、知事に報告をした。

其報告、スヴェーデンボルヒの、語る處と一點の相違をも、見出し能はなかつた。

此事實は十八世紀の中頃より、歐羅巴に傳はる確實動かす可からざる、奇談にして、之れには、最も信憑すべき、記録も現存し、近年歐洲諸學者間に、研究されつゝある問題である。

猶一例を掲げ研究材料の一助に供す。

佛蘭西の醫學士チエーフエーと言へる人の友人にて、ドクトル、ゲロールと呼ぶ紳士の家にマリーと呼ぶ、一下婢が居た。

此婦人は生來神經遲鈍の質であつて、時々自然に睡遊状態に陥る事が屢々で、又たゲロール爵士の爲めに、催眠術を施されて人爲の睡遊状態を呈する事も度々ある。

醫學士チエーフエーは此マリーの奇怪なる心的状態を、佛蘭西生理的心理學會へ報告した事實は概ね左の如くである。

一日マリーを催眠状態となし、其實験に列したる予(チエーフ)を始め十人餘の知名の學者輩であつた。

其時マリーは、列席十二人の人々の隠袋内にある物或は風呂敷にて包みたる物體等を試みに透覺せしむるに一々的中したれば、猶物體を幾重にも包み、隠袋内に入れ之を質すも答明確であつた、最後の試験は、予が此實驗席に臨む前に、友人たるアルギールの一武官より一通の書狀を得た、其書狀は、其武官が霖雨の季節に野營をなしたる爲め、赤痢に罹て大に惱める事を記せり。

予は其書狀の納められたる封筒を取去り宛名なき別の新らしき厚き封筒に、其書狀を入れ堅く封じ、又た之を更に厚き、決して透視せられざる封筒へ容れ、其内には予自身の外、何人と雖、通常感覺にては之を知る事は、到底不可能たらしめた。

予は件の書状を、密かに或る一婦人に渡し、何人にも知れざる様ドクトルゲロール君に渡すべく吩咐け置いた故に、ドクトルゲロール夫れ自身も、何人の手より來れるかは知る可き筈なく、唯だ其一婦人より己の手に來りしを知れるのみ。既にして催眠状態に陥りたるマリー女の手にてゲロール君は其封筒を載せ、而して彼は言ふた。

「マリーよ、汝の掌上には何物があるか？」

マリー女答て曰く。

「一通の書状よ!!」

ゲロール君再び問ふて曰く

「可し、然らば其手紙の何人に宛てられたるものぞ」

マリー女、沈思黙考、答ふるに

「ドクトル、デュフェー君に宛てたる書状であるよ!!」

更らにゲロール君は、問を發した。

「應、然らば其書状の發信人の何人であるかを知れるや」

マリー女速座、言下に答へて

「差出人は確に陸軍の一士官である、併し妾は其人を知らず」

ゲロール君また問ふ

「其書状の用向記事は何なるや」

マリー暫時考へ、答へて曰ふ

「其士官は病氣に罹り、其病氣の事に就て認めあるのである」

ゲロール君は、猶深く問ふに

「是は如何なる疾病であるか、其名を知れるや？」

マリー女答へて

「能く知り、其病症はメスランドの樵翁が罹りて未だ癒えざる病症と同一である」

是にて問答は終つたが少からず予は驚いた。

マリー女のメスランドの樵翁とはゲローナル君の嘗て診療を施した赤痢患者である。然らばマリー女は、其書状に於ける心的作用の實驗は、悉く的中成功した事は明白である。マリー女の暗示的心理作用は、實に研究すべき價值充分である。

前述する如く、スヴェーデンボルヒと言ひ、又た此マリー女と言ひ、メترل女、皆な實に天眼通或は神通力の名稱を付す可きも、異常の心靈を發揮せしむるに足る練磨を積んだ一種の人類と斷言して少も憚らない。

七 他動的心靈發揮と幽靈幻覺等の暗示

獨斷的にして極めて偏傾の態度をとれる、多くの學者輩は、狭量の實見的智識の範圍内の外は、洪大無邊なる宇宙間何物をも存在するの道理なしとの斷案を下し居る爲めに、偶々未究未探不可解の事物あるも、妄誕虛説として絶對的無の一字の下に葬り

去りつゝあつたが、漸時學者輩の思想發達したる近年に至り、學界の態度少しく變じ批評的に傾き、其事柄の合理的と否とに關せず公平なる探究心を生じ、其事實を精細に觀察精査を遂ぐる傾向を現はし來つたは、學界の爲め慶賀す可きである。

試みに思へ、十年前の學界の態度たらしめなば、千鶴子女史の千里眼の如きは僅少な一部分の實驗者の外は、一笑に付し一顧の價値なき物として拆けられたのであつたが、幸ひに學者の態度變調を來し、充分なる研究が出来るのである。

元來千里眼の如き研究、極めて至難に屬するや言を俟たざるも、前述に係るメترلマリー、千鶴子の如きは皆人の要求を容れ、其要求に満足を與ふべき、まづ意志を起し次で靈妙なる自己の心靈を發揮せしめたる科學上不可解の現象にして、之れ明らかに自動的の心靈發揮と稱す可く、若しスヴェーデンボルヒの如きは、誰人にも要求識別を乞はれたるに非ずして三百哩以外の出火が彼の聽覺に感したるか、視覺に映じたるか未詳にあるも、免に角其事實を知りしは何であらふ、自動乎他動乎、將た又偶

然乎。

四〇

スヴェーデンボルヒと殆ど同一なる出来事を現に著者は目睹した事がある。想ひ起す、明治三十一年の二月廿日の夜であつた。著者は一雑誌の主任記者で、其氏名は今爰に明記するを憚るが、其記者と共に、淺草公園へ散歩に出掛け、某旗亭で淺酌を催ふした、其席上其記者は、頻りに睡眠を催ふし席に耐へ難き容子にて予に對ひ「暫し許し玉へ」と言ふか否や、腕を枕に睡眠したが、凡そ廿分間も過ぎたる頃、悪夢にや襲はれけん、消魂しき叫びの聲を出して突如刎ね越き「ヲ、氣味の悪い」と呟きつゝ、頻りにキョト／＼四邊を見廻して居る、予は愕きと可笑き混合の念は打たれ、頓には質問の辭は出ながつたが漸く「如何したのだ、夢か、恁麼な夢だ」其記者は、吻と吐息をして「恁麼なも斯那もない、白痴／＼しくて人には咄が出来ん」と口を緘して無言の儘不安の面色をして居る、斯様の場合は誰しも強ひても尋ねたくなるは人情である、予(著者)は頻りに其理由を問ふて止まなかつた、

終に其記者は、迷惑想に且つ羞色を帯びて一段聲を低め

「君、笑つては不可んせ。實はネ幽霊が出たのだよ」

「埒もない、詰らぬ事を言ひ給ふな」

と予は頭から眩したものの、満更ら其儘耳を掩ふて終ふ氣にもなれなかつたが

「夫ゆへにこそ、始めから咄すのを拒絶したのだ強いて噺はしない」

と其記者は少しく憤としたらしい口氣で、再び口を緘した。

其當時予(著者)の頭は絶對的に、此宇宙間科學上解釋の成し能はざる總ての物は皆な架空虚妄の説である、殊更ら幽霊、夢知らせ、前兆等其他あらゆる不思議なる説は、一笑に付し去るのみで、注意研究すべき念慮は毛頭もない、夫が爲め此時も先方が勿體振つて容易に噺さぬので、其後は強いて問はず、其旗亭を立出づると、其記者は予に向ひ、急用ある旨を告げて傍の腕車を備ふて北へ去つた。

此記事だけでは、讀者は何が何であるか判らぬであらふが、此出来事こそは後日に至

つて予は明らかに他動的心靈發揮である事を讀者諸君へ紹介する事が能るに至つた。其記者の義妹に佐代と呼ぶ一婦人が、吉原の某樓に娼妓をして居る中事故ありて窮迫に陥り某なる者と情死を遂げたので、恰も予と其記者が、淺草の旗亭で會飲した時刻に情死を決行したので、其記者が睡眠状態中血に塗れた義妹佐代の姿及び情死の凄慘を極めし現場を認めたので、其記者は予と分袂して惶惚腕車を馳せて某樓に駆け付けしも、既に遅し彼の女は既に情死決行の後で、某樓は彼等男女の情死ありし爲め、大混雑中であつたこの事を、予は其翌日はを知つたのである、聊か奇異の感のないではなかつたが、深く不思議とも思はず偶然の出来事と信じ、固より研究するの念慮は生らなかつた、其後數年を経て予(著者)の自身に斯る事があつた。

明治三十七年八月五日の夜、予は或る娛樂に耽つて自宅へ歸るも忘れて居つた、午前十二時頃何となく、頻りに不快を感じ、理由とてなく不安の念浮んで、今まで夢中に耽つて居た娛樂も一顧する氣も失せた、其場へゴロリと横に成つたが、幻の如

ふに當年生れの嬰兒が死んだとまでは、判然はせなかつたが、異常あるやに見へもする、爾云又感じも生つて來るので、不圖先年の友人と會飲せし時の奇談を想ひ起し取敢へず歸宅して見ると、不可思議にも予の宅を出る際までは健康體でありし予の愛兒が午前二時三十分頃死亡して居た。

其事ありし以來、予の頭は徐々に變調を來し、不可解不思議なる事物に對しては極力研究するの感念が熾になつた。

幽霊とか夢枕とか言へる不可解の事物に對しては、古來歐米の學者も、日本の學者も其説く處相同じからずと雖、歸する處は其存在を認めず、單に幻覺の心的作用と言へる説が多數を占めて居る、予も亦た同感であるが、其幻覺心作用が自動的であるか、他動的であるかを研究するに、予は自他兩様ありと信するのである。

死するとは夢にも思はざりし予の愛兒死亡の事が念頭に浮んだり、或は夢想だもせざりし義妹の情死状態が、有りのまゝ感覺した雑誌記者等は、決して自動的の透覺若く

ば幻覺、又感應とは決して言へぬであらふ。
 他個の心靈發揮の反應が、自個の心靈をして靈妙なる發揮を起さしめて、知らしむる
 と言ふの外なからん。
 他動的の心靈發揮に於ける幻覺知覺は確に事實を證明し、其存在を認むるに足るも、
 夫に反して自己の精神上或刺戟を受け、幽靈出現する場合、又は實驗せんと欲するは
 之れ明白に自動的作用にして、或る暗示に基づく架空の幻覺が多い様である。
 斯るが故に、千里眼透覺も、求めずして幻覺透明する場合は其物體が決して誤見する
 様な事はないが、他人の要求に従ひ時と場所を嫌はず、透覺せんとする時は、往々誤
 りたる幻覺をなすは理の然らしむる以所ならずや。

八 覺醒状態と催眠状態の千里眼

幽靈の出現時刻が、概ね闇としたる夜半に限られて居るかの如きは、催眠状態の幻

覺が多いからである、夫に反して現實に加旃、白日覺醒状態の勞動に従事しつゝ、
 幽靈若くは不透明の物體中にある、或物を透覺したる人も多々ある、之れに因て鑑察
 すれば、千里眼透覺には、催眠状態と、覺醒状態の區別が生る。
 斯く論斷すると、幻覺と透明を混同して居るかの如く誤認する者あるかも知れねば念
 の爲め一言して置く、言ふまでもなく、透透と幻覺とは決して同一の性質にあらざる
 は、讀んで字の如くだ、然れども爰に一の疑問がある。
 千鶴子、メトレル、其他何人の視力と雖、人類以外の兩眼を有せざるや、是又論を俟
 ず、殊に千鶴子の如きは、嘗てトラホームに罹つた常人より視方稍劣等であるさうな
 然るに二重三重の不透明體に包まれたる其中の或物體を、何々である、と透明せしむ
 る異常の視力がある筈はない、必ず覺醒状態にしる、催眠状態にしる、孰にしる、物
 體なり、文字なりが濃麗模糊の間に映じ來れる如き、知覺ある爲めにあるのだ、然ら
 ば斯る場合は言語の上に何と言ひ現すが正當なりや、事實の透覺か將た幻覺に因れる

心靈發揮か。

九 幻覺を證明する岡崎の千里眼

千里眼透覺は前述する如く、御船千鶴子女史獨有の神技にあらざる事は明々白々であるが、催眠状態と、覺醒状態の孰れが正確に透覺し得らるゝや、研究の價値ある問題にして、此解決は多くの事實より其統計をとり、緻密の判斷と監察を要するのである、幸ひ最近の事實としては、

三州岡崎町字連尺松浦惣三郎の二女、菊子(三)梅子(二)の兩人御船千鶴子にも勝る千里眼ありとの噂高きに福來博士は廿四日岡崎に出張せる——(中略)同日午後二時廿一分岡崎着直ちに伊藤方にて兩女に面會の上廿五日前八時より實驗の事に決せしが記者は取敢ず透覺實驗を見ん事を望みしに伊藤老人は甘諾して梅子を十疊の間隅に坐らせしが座に就かしむる時伊藤氏先づ草座蒲團に向ひ「ヤ」と掛聲して九字

を切りて後ち夫より伊藤氏約一分間程讀誦する中に梅子は膝の上に兩手を突きて瞑目せる様確かに催眠術にかゝりたる様なり

第一回の試驗 伊藤氏は其時梅子に見えぬ様 木の葉形の菓子パンを持ち來り新聞紙に包み鐵瓶の中へ入れ床の間へ置き「お答へなさい」と伊藤老人言へば梅子は全く眠れる如く何事も答へず一分程経て伊藤氏は更らに「よく判りましたか、判つたらお答へなさい」と言ひしに梅子は漸く「判ります」と言ふ「何です形はどういふものですか」との伊藤氏の問に梅子は「夫は墮圓形のものです」と答へ「色は」この問に「白いものです」と答へ「品は何です」の問に「菓子です」と答へ——下略
第二回の試驗 伊藤氏は又自家にて賣り居る繪葉書を三枚取寄せ其中の一枚を密かに漆器の硯箱に入れつ、梅子の膝の上に乗せ第一回試驗の時の如く問ひしに今度は梅子は稍久しく答へざりしより再三再四問ひたるに漸く「樹の生いて居るものが見えます」と答へ「其他に何か見えぬか」との伊藤氏の問ひに「家が見えます」と言

ひ「どういふ形のものか」との問には「長いものです」と答へた、繪葉書は岡崎なる西本願寺別院の長き建物の繪葉書にて樹木あり
 第三回試験は、燐寸を新聞紙に包み鐵瓶内へ入れ其答は「四角な物」と得更らに詳く問はれて「花の様な物が見える」と答へ品質は何と問はれ最後に漸く「燐寸」と

答へ得た(明治四十三年九月二十五日報知新聞)

如上是報知新聞記者が、福來博士に先んじて實驗したる決果の概略にして、廿四日夜福來博士熱心に試験を梅子菊子の両女に行つた、其決果は

第一回が、墨と菓子を入れた箱中に入れ透覺せしめ、其答は、墨のみの菓子小判形の物とのみ答へた。

第三回が、鐵瓶中に陶器の水容器を容れ、是又白き四角な者とのみ答へ、明瞭な透覺は出来なかつた。

要するに好成績ではあらざりし、并は其夜岡崎に小供等が樂み遊ぶ、天神祭がある爲

め精神上の統一を欠ける爲と、福來博士は斷定を下して中止をした。

廿五日の試験は、妹梅子に對する西洋ナイフと白銅の透覺は、辛ふじて、ナイフは明的せしも、白銅は答得ず、姉菊子は、懷中時計の鐵瓶内に容れたるもの全然答を得ず

次に饅頭を鐵瓶中へ容れたるもの、是又答に苦むを見て、透覺の介添人とも稱す可き

伊藤老人呪文に紛らし、其物體の饅頭であるを灰かして、無理なる解答をなさしめた斯る事實を目撃察知した福來博士は、此老人ありては實際の試験を行ひ難と、種々苦心の決果、兩女のみを對して密かに試験を行つた、其試験に使用したる物體は

- 一、釘拔を白紙に包み鐵葉罐に入たる物。
- 二、白黒二個の碁石各一個宛紙に包み同鐵葉罐に入たる物。

其答へは、菊子は第一に對し黒き長き物とのみ答へ、第二物に對ししは「今日は氣分が悪うて出来ませぬ」と謝絶をした

妹梅子は夫に反して、第一の釘抜は全然答へ得ざりしも、第二物の基石の方は明瞭に正確なる答へをしたのである。

福來博士は、両女に大なる望みを屬し將來に於ける精勵して練習すべきを勸め最後に両女に對して介添人とも見る、伊藤老人の側に有ると否とは透覺を行ふに孰れが容易きやとの質問に對し、両女は、老人が種々急ぎ立て或は駄目を押しなごする爲め、心落付かぬ事もあると答へをした。

此試験に於ける、試験者福來博士及び報知記者と、受験者梅菊の両女及び介添人伊藤老人の動作并に試験の成績等を、冷靜なる頭腦を以て研究して見よ、大に得る處あるべく、千里眼透覺は確に其物體が眼界に直覺的に、明々瞭々と其體形が映じ來る物でなく、徐々に、しかも朦朧と其心靈に浮び來るので、其腦力に因て其幻覺を何々體と判斷し得るのである、其考證は

一、釘抜を黒き長き物と答へ

二、西本願寺の建物の繪葉書を、長い家が見える樹木があると答へ。

三、燐寸に對して、四角な物と答へ、次でペーバの櫻花を見て、花の様な物が見える
と答へ、最後に漸くマツチと答へ得た。

然れば此答振に就て見ると、始めより直覺的に燐寸はマツチ、釘抜は釘抜と見えざるも、幻覺は漸次物體名が心靈に感應し、其記憶に係る名稱を答へ得るのであるは、獨り岡崎千里眼たる菊梅両女ばかりではない、千鶴子の如きもさうである、現に
深水虎藏を、深井虎藏と答ひた如く、水と井と意義に於て滿更飛放れては居らぬが千鶴子が判斷を誤りて答へたので、是を見ても明かに物體文字は眼界に映すのでなく、精神上に浮び來る幻覺であるを立證する事が出来る。

千里眼透覺術の修養

千里眼透覺を行はんと欲するものは、修養の眼目としては

一、意志の修養

二、感情上の修養

三、身体上の修養

此三ヶ條の修養が欠ける場合は到底完全なる透覺は行ひ難く、假し強ひて行ふも其幻覺、正確なる幻覺にあらずして妄想誤謬に陥るを以て成功すべき筈なきなり。

一 意志の修養

透覺物其者に滿身の熱血を集中したる視力を浴せ、凡ての注意を凝集し一切の事物に對し、全然無念無想となり決して外物の爲め如何なる事ありとも動き又動されざる様強固の意志を持つ事。

二 感情上の修養

感情の激動 分り易く言へば、恐いとか嬉しいとか耻しいとか、其他凡て精神の靜平を欠く可き事は、透覺に大なる妨げとなり、或は全然成し能はざるに至るのである。併し感情の發生は、其時の境遇に應ずる、必然發生するは人類の通有性であるから、強ひて發生する凡ての感情を仰制するは、至難に屬するも、一定の場合、即ち透覺を行ふ際のみは、境遇の如何を念頭より悉皆去らしめざる可からず、之れ感情修養の主眼である。

三 身体上の修養

千里眼透覺を行はんとする者は、まづ精神の靜平を少しにても欠くる時は、萬の素養ありとも、成功せざるは論を俟たざる所にして、精神の靜平を保つには、健康體ならざる可からず、身體の孰れの部分なりとも患部あらんか、其痛痒若くは不快を感ずる爲めに、精神の靜平は、自然破らるゝなり、然れば、身體の健康を保つは修養の一

である。

五四

透覺千里眼 終

明治四十三年十月廿三日印刷
明治四十三年十月廿八日發行

定價金二十錢



發行者兼

東京市本所區相生町二丁目六番地

高橋友太郎

印刷者

東京市日本橋區若松町二十一番地

井出五三九

印刷所

東京市日本橋區若松町二十一番地

日進社印刷所

東京市日本橋區若松町四番地

發行所

湯淺春江堂

電話 浪花 四八六二番
振替口座東京 一八〇六番

空前絶後 **破天荒の一大秘書**

正三位東久世通禧伯題辭
從三位土御門晴榮男題字

神道實行派管長柴田禮一貌下題歌
權大教正佐々木高明先生著述

洋裝總クロース

秩入頗美本全一冊

定價金壹圓

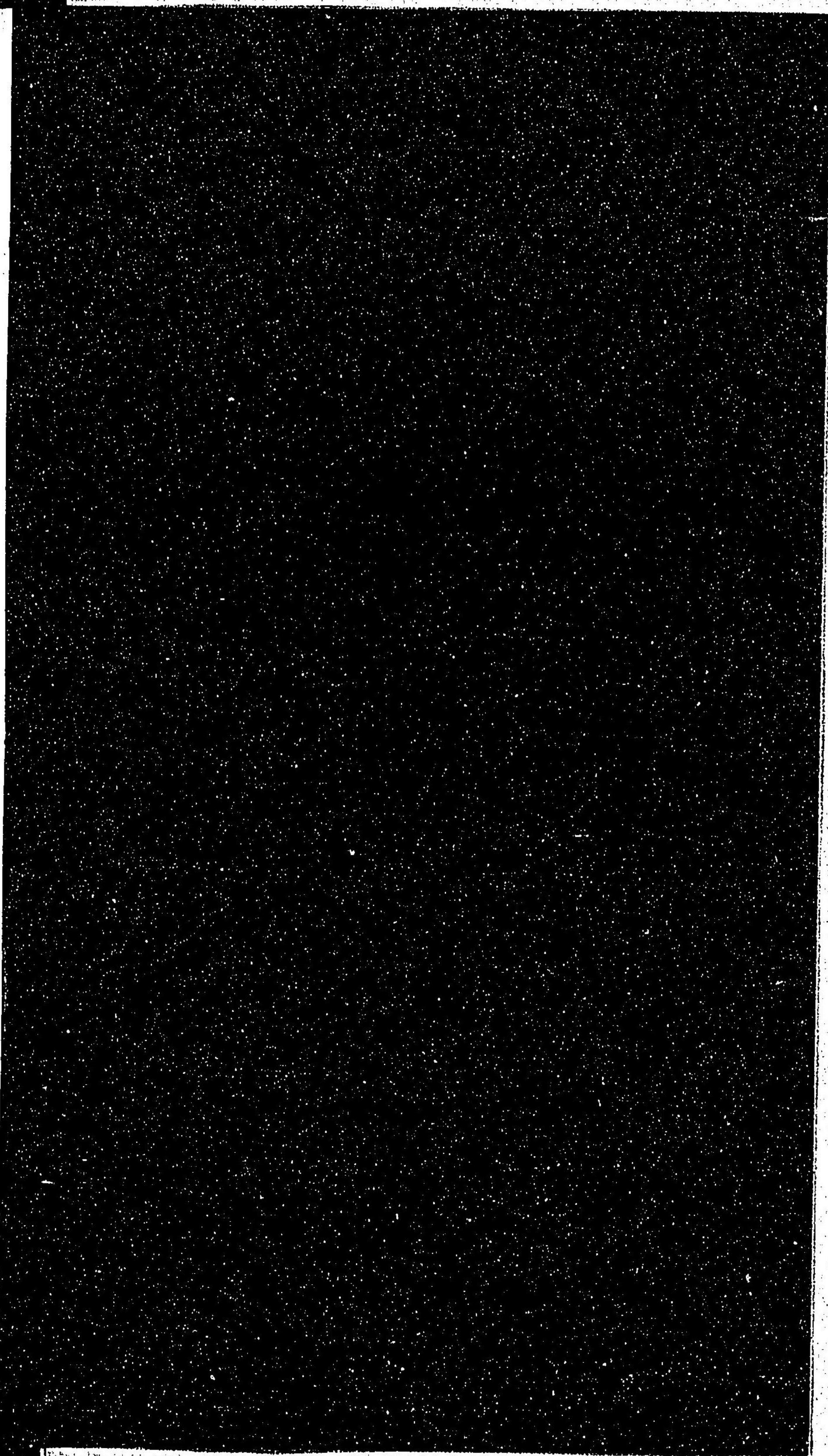
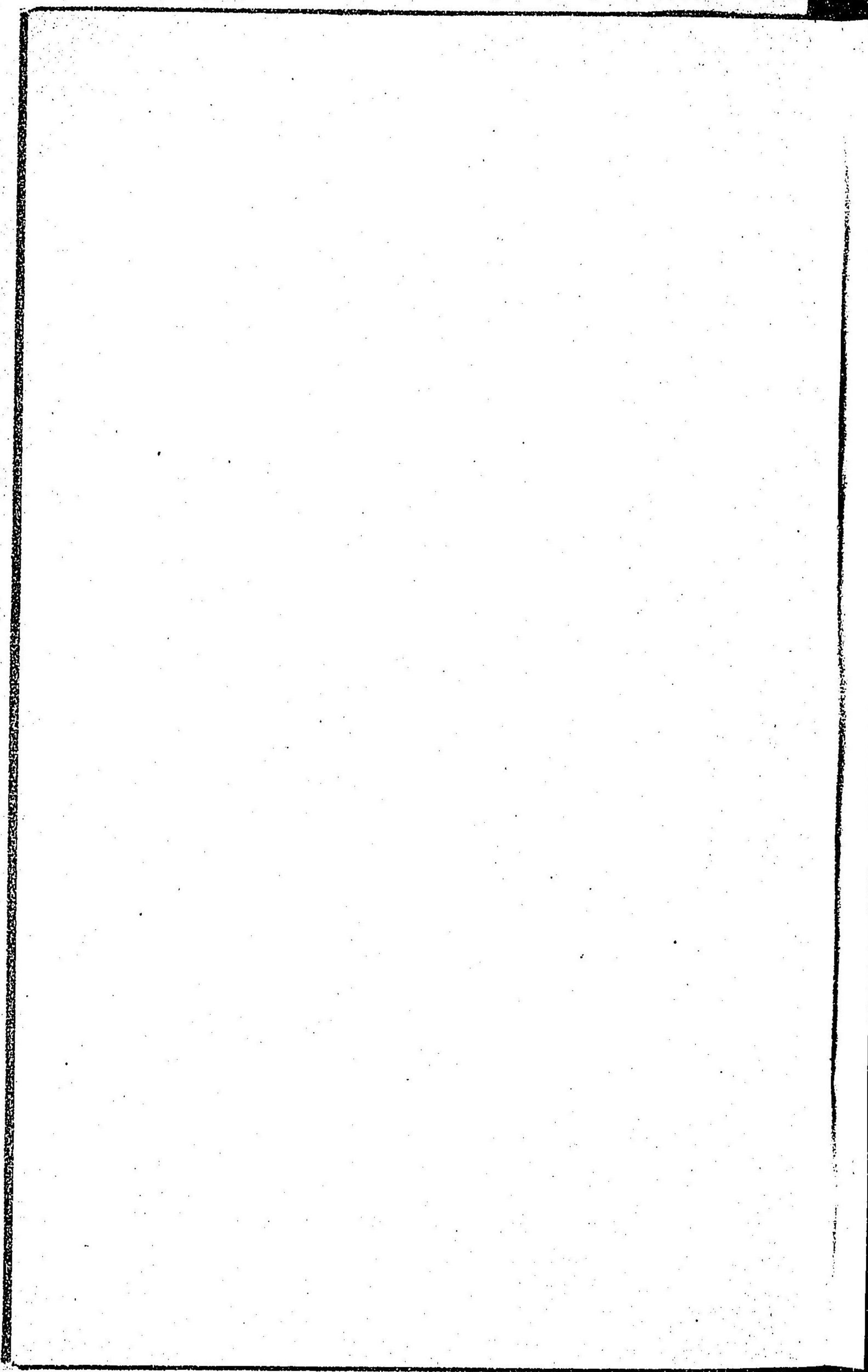
郵税金八錢

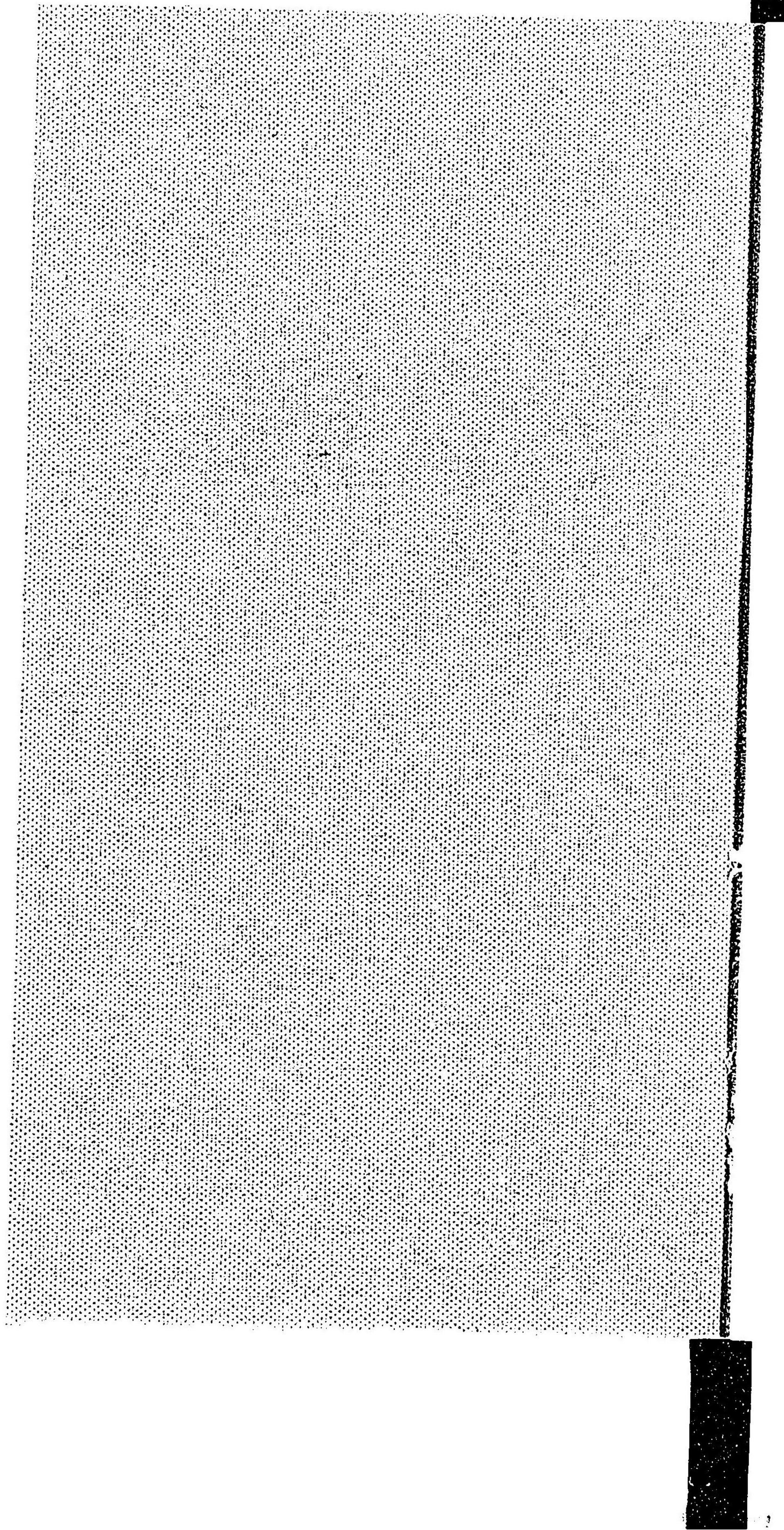
靈妙 **感應術奧義**

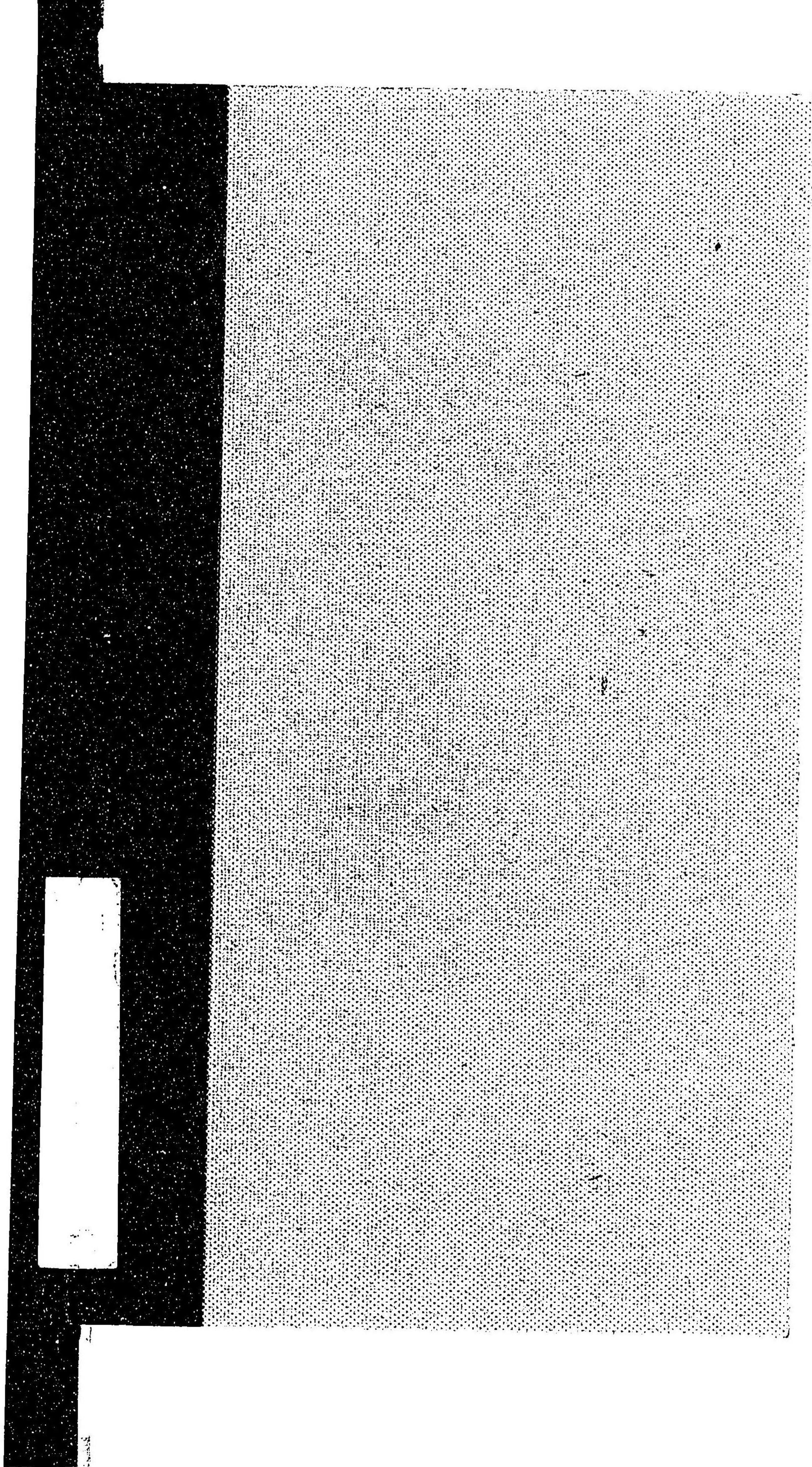
宇宙の神秘を探り人生奥義の解決を求めんと欲するは現今學者紳士其他一般
人士の渴望する所也而かも這般の眞理は偉大にして能く人生を支配し運命を
發揮し成功上の光明を放てる感應術は其等の秘密を遺憾なく發揮し最近の例
證としては博士間の疑問に屬する心的作用の如き**千里眼**は容易に其理
を氷解せしめ且つ行はしむる古今絶無の一大秘書今や在らゆる**宇宙不**
可解の疑問を解決し運命開拓の先導者として出でたり故に將來社
會の優勝者となり幸福と名譽を保たんとするの士は必ず座右に備るの必要あり

264

399







透覚容易 千里眼

高橋 政之

国立国会図書館

特21

192

012788-000-3

特21-192

千里眼 (透覚容易)

高橋 政之 / 著

M43

AAJ-0031



